

---

# 月島神子は覗いている

椎名 紘之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月島神子は覗いている

### 【Nコード】

N0335Z

### 【作者名】

椎名 紘之

### 【あらすじ】

高校受験を控え、近所の神社に合格祈願へとやってきた橘京介は、雪に埋もれた境内が荒廃していることに気づく。なんとそこは廃神社だったのだ。仕方なく参拝を済ませ、早々に神社を立ち去ろうとする京介だったが、ふと背後から声がする。不審に思い拝殿の中を覗くと、そこには鏡の中に住む不思議な少女がいた。

(1)

昔から人よりは信心深かった。でも特定の神様を信じていたわけじゃないし、昔から神と聞いて思い浮かぶのはジーザス・クライストでもブッダでもなく、雲の上に乗った白ひげのじいさんだった。木の杖を持ち、頭に黄色い輪っかをつけた安っぽい神格像は、あくまで子供時代に形成された漠然としたイメージであって、実際に存在するどの宗教の神でもない。

本当の神様はじいさんでも坊さんでもなく、どこにでもいそうな少女の姿をしている。俺がそんな突飛な事実を知ったのは、高校受験を間近に控えたある冬のことだった。

「お願いしますッ！ この橋京介たち騒が争けめをどうか星条学園せいように合格させて下さい！」

賽銭箱の前で強く目を閉じて、大きな拍手を二度鳴らすと、静まり返った境内に乾いた音が響いた。願いを込めた反響音が、しんと降り積もる雪に吸収され、溶けていく。今朝家を出たときはそこまで寒くなかったが、なるほど母の忠告は偉大だ。辺りは思ったよりずっと肌寒く、吐く息は絶えず白かった。素直に手袋やマフラーをしてくればよかった。

かじかんだ手をさすり、目を開けた俺は、ふといくらか参拝の手順を間違えていたことに気付いた。何か物足りないと思っていたが、鈴を鳴らしていない。あのジャラジャラという甲高い音がなければ、せっかくのお参りも台なしだ。梅干のない梅おにぎりみたいなものだ。

「……あれ？」

だが天井からぶら下がる綱に手を伸ばした俺は、上を見て動きを止めた。鈴がない。神社といえはお決まりの大きな鈴が、根元からなくなっている。というより、初めからそこに鈴なんてなかった。それどころか、拝殿そのものがどこかボロ臭い。

改めて周囲を見回してみると、他には一切人影がなかった。受験シーズンを控え、この時期はどの神社も少なからず盛況なはずだが、参拝客どころか管理者も見受けられない。周りを原生林に囲まれた敷地内には、猫の一匹もいやしなかった。

「まさか、そんな……」

苦笑い混じりに、もう一度神社全体を確かめてみる。建築物にも石畳にも雪化粧が施され、わかりづらくなっているが、境内はすこぶる荒れ果てていた。

ここは廃神社だったのだ。

「い、いくらなんでも不吉すぎる」

そもそも俺がこんな郊外のうらぶれた神社を訪れたのは、先程も言ったとおり高校受験の合格祈願のためだった。人混みが苦手、街の大きな神社を避けた俺は、下見の際に偶然見つけた、この月島つきしま神社にやってきたのだ。

先日の進路相談、担任から「合格は絶対無理」のお墨付きを貰った俺は、はつきり言って途方に暮れた。諦めずに勉強すれば何とかなると信じていたが、いささか一年だけの勉強では足りなかったようだ。それだけ星条学園のレベルは高い。

ならばいつそのこと、神に頼んでみることにしたのだ。

どうせなら奇を衒おう。有名な神様ではつまらない。正体の知れない神の方が、大穴狙いには適している。さすがに廃業済みとは思わなかったけど。

「ま、いいか」

むしろ清々しい思いを抱えながら、俺は拝殿を後にした。どうせダメ元。あとは気まぐれな神様が、願いを聞き届けてくれるのを待つだけだ。

「いいかではない　おぬし、何か大事なものを忘れておらぬか？」  
聞き慣れぬ少女の声に、俺は思わず振り向いた。

だが誰の姿もない。相も変わらず、そこには寂れた廃神社があるだけだ。しんと静まり返った境内は、どこか神秘的でもある。

「耳鳴りかな、勉強のしすぎだな、うん」

自分を納得させて、俺は再度踵を返した。すると

「耳鳴りではない！ それにわざわざわらの力添えを請いに来るぐらいだ。どうせそこまで勉強に打ち込んではおらぬのだろう！」

また少女の声だった。確かに聞こえた。どうやら気のせいではない。

「誰だかわからないが、姿を見せろ！ そんなに勉強してないことを見破ったのは褒めてやる！」

調子を合わせて俺は叫んだ。大方近所の子どもがふざけているのだろう。いくら受験間際でピリピリした時期とはいえ、いたいけな子供をあしらうほど落ちぶれちゃいない。

今一度周囲を警戒したが、目立つ場所に人影はない。そこで俺はピンと来た。だだっ広い境内。人が隠れられるとしたら拝殿の中しかない。

「見破るなど造作もない。何しろ私は神なのだからな」

少女は得意げだった。どうやらこれは神様ごっこらしい。

「その神様ともあるう御方が、いたいけな中学生を寒空の下に引き止めてどういうつもりだ！」

さすがにちよつと凍えてきたので、俺はやや早口で返した。鼻水をすすする。帰ってすぐ風呂に入らなければ風邪を引いてしまう。

「どういうつもりとはこっちの台詞じゃ！ そなた、参拝したのにも関わらず賽銭を入れてないであろう！」

言われてみて俺ははつとした。祈願だけはきっかり済ませたが、確かに賽銭は入れてないような気がする。

「悪かった！ 順序が逆になったが、賽銭は入れる。これで勘弁してくれ」

俺は財布から五円玉を取り出して、賽銭箱に投げ入れた。カランという寂しい音が古い木箱に吸い込まれる。こんな廃神社で回収されることもないだろうが、一応神事であり、礼儀だ。

そこでふと、俺は少女の正体を突き止めたい衝動に駆られた。

束の間の好奇心。それにこの寒さでは、中にいる少女だって風邪を引いてしまう。気付かれぬようゆっくり拝殿の戸に手を掛けて、俺は思い切りよく扉を開けた。

「……あれ？」

だが、そこには誰もいなかった。

四畳半もない狭い空間に埃臭さが充満している。神具もしめ縄も何もない伽藍堂な内装は、今や完全に廃墟と化していた。所々床が抜け、壁にも穴が空いている。

「誰かいないのか……？」

そろそろと辺りを確認するが、人っ子ひとりいやしない。人が隠れる場所もない。

だったら一体、どこから声がしたというのだろうか。

場所が場所だけに、ヒヤリとするものがあつた。打ち捨てられた神社。そこにセンサーシヨナルな事件でも捏造してやれば、心霊スポットとして持て囃されるのもわけないだろう。

「……ひょっとして、既にそうなってる？」

つぶやいて、一層ぞくりとした。言わなければよかった。言霊反対。俺は何もなかったことにして、踵を巡らせる。あとは石階段の下へ向けて、猛然とダッシュするはずだった。こんな気味の悪い場所とはおさらばだと。

だがそれはできなかった。それまで確かに開いていたはずの戸が、ひとりでにピシヤリと閉まったからだ。

閉じ込められた……？

「うわああああ、助けて神様あ！」

神頼みにはこれ以上ない場所で懇願しながら、俺は戸口に手を掛けた。だがびくともしない。まるで不思議な力で押さえつけられているようだ。

「失敬な。まるで人を悪霊のように……だからわらわは神だと言っておるだろう！」

背後から響いたのは、あの少女の声だった。もちろんそこには誰

もない。

だがよく見ると、床に一枚の鏡が落ちていた。決して靈驗あらたかともいい難い、端のかけた丸鏡。台座も何も付いていないが、置き忘れられた神具だろうか。しげしげと見つめていると、近くで少女の溜息が響いた。

「ようやく気付いたか……というかそなた、やっと賽銭を払ったと思えば今度はいきなり拝殿に入り込むとは、とんだ罰当たりな人間だな」

なんと声はその鏡から聞こえていた。まさかとは思ったが、紛れもなく鏡から声がする。

警戒しつつも、俺はその鏡を覗き込んだ。本来ならば、不審に満ちた俺の顔が映るはずだ。平均的な身長。黒髪でやや目つきの鋭い、どこにでもいそうな少年。それが俺、橘京介であり、毎日見続けたその顔を見間違えるわけもない。

だがそこに映っていたのは、見知らぬ栗毛の少女だった。

ゆるふわな長髪を背中垂らし、ペルシャ猫のような目を湛え、きゅっと引き締まった鼻をした美少女がこちらを見つめていた。細身に可愛らしい白のツーピースを着こなし、頭には花柄の髪留めがついている。よくある女子高生の私服姿といった感じだった。

あらかじめ言うておくが俺は紛れもなく男子であり、ついでに言うとうと女装癖もない。今日の服装は男物のダッフルコートだし、髪だって男としては平均的な長さだ。そもそも俺はこんな美少女なんかじゃない。

「なんだ……これ」

鏡の中は部屋になっていた。畳敷きの和室、と言えばいいだろうか。ここから見える三方の壁に扉はなく、畳わずか二枚分のスペースに彼女はいた。その中心に炬燵があり、彼女は炬燵蒲団の中に半身を埋めている。炬燵の上にあるのは、茶色の木製容器に入った蜜柑と、質素な湯のみが一つ。それとテレビのリモコンとゲームのコントローラーだった。隣には小さなテレビがあり、そこから伸びた

コードがゲーム機と繋がっている。正月における中高生の部屋を如実に連想する部屋だった。

わけがわからず茫然としていると、少女が体を前に乗り出した。

「そなた、高校に合格したいのdarou? これも何かの縁じゃ。その願いを聞き届けてやろうか?」

嬉々として少女は言った。少し偉そうだが、活発で心地のよい声。「な、何言ってるんだよ。というかそこは何処で、お前は誰だ……?」  
どんな仕組みでそうなってるんだ?」

呆然とした気持ちを通り越して、俺は矢継ぎ早に訊ねていた。あまりの出来事に気が動転していたのかもしれない。

「……だから、先程から神だと言っておるdarou。なんべん言わせる気だ」

呆れ顔で、彼女が溜息をつく。それから彼女は炬燵の上の蜜柑に手を伸ばし、ヘタから親指を突っ込んだ。

「神って……お前が? イメージとかなり違うんだが……なんかずいぶんと今時の女の子だし……」

「今時で悪いか? 神とて、今時の流行を掴まねばならんのだよ。それぞれ時代のニーズとやらがああるからの」

「ニーズって……」

ずいぶんと突拍子がない(自称)神様を観察しながら、俺は至極当然な結論に至った。

「これは夢だ」

きつと現実世界の俺は勉強の途中で居眠りしてしまったんだ。早く起きないと。今日は近所の神社にお参りするんだからな。

「夢ではない、現状把握能力に難儀のある輩じゃのう」

皮を剥いた蜜柑を可愛らしい口に放りこみ、何度かもぐもぐ言わせた後、彼女はそばにあったティッシュで鼻をかんだ。

「そなた、星条学園に合格したいのdarou?」

「なぜそれを!？」

「先程熱心に祈っておったじゃろうが。確かにあそこは名門だ。今



まであの学校に合格したいと祈願した生徒は、万を下らぬであろうな。しかし、その全てを合格させるわけにもいかなんだ。何せ人間世界には枠というものがあるからの。わらわのように唯一絶対の存在であれば楽なのだが、多数に分けて創ってしまった以上、神の側にも負い目はある。こんな辺鄙な場所で祈願した人間も久しぶりだ。どうだ、その願い、叶えてやらんこともないぞ？」

不敵に笑ってみせた少女は、今度はゲームのコントローラーに手を伸ばした。ずいぶんと落ち着きのない子らしい。

「叶えるって……そんなことできるのか？」

どうせ夢の中の出来事。いつ醒めるともわからないので、俺は話に乗ることにした。もし正夢にでもなれば儲け物だし。

「当然。神の名に賭けて人間風情に誓ってやろう」

高飛車な態度にむっとする気持ちもあったが、怒っていても仕方がない。夢の中であろうと相手は神様。逆らっては罰が当たりそう  
だ。

「じゃあ、お願いしてやろう！」

「……神格に対してその口の聞き方は気に食わぬが、まあよい。ただし条件がある」

「条件って……さっき寶銭を払ったじゃないか！」  
五円だけど。

「あれは願いを聞き届けるための交信料であって、契約料ではない」  
見たこともないシューティングゲームをプレイしながら、少女は説明した。

「契約って まさか命を貰うとか」

その不穏な言葉に俺は渋面した。願いと引換に魂を売る……寓話  
なんかでよくある話だ。

「神を何だと思ってる。そうじゃのう……無事合格した暁には、  
わらわの願いを叶えて貰う。それでよいか？」

その提言に、俺は思わず怪訝した。可笑しな話だ。なぜなら  
「神様なんだから自分で叶えればいいじゃないか」

創造主たる神が、なんだってわざわざ人間に叶えて貰うような願いがあるのか。すると彼女は複雑そうに柳眉を歪め、コントローラを炬燵の上に置いた。

「神にも色々と事情があるのだ。そんなことより、願いを叶えて欲しいのか、そうでないのか！」

痺れを切らした子供のように、彼女は俺を睨んだ。鏡越しの世界。少しふくれっ面の少女は、神様に対して失礼だが、何だか可愛らしかった。

「……いいさ。合格した暁にはお前の願いを叶える」

半分は乗りで答えたのだが、少女はぱつと表情を明るくして立ち上がった。

「では契を」

彼女は神妙に向き直り、鏡に向かって手を当てた。

「契って……」

「何をしておる……はやくそなたも手を！」

手の平の向こうから急かす声が聞こえる。何のことがよくわからなかったが、見よう見まねで、俺は彼女と同じく、鏡の面に手をつけた。

ひやりとした感触。そこに温もりは存在しない。

「これでいいのか……？」

自らの手で鏡を塞いだ形になり、中の様子が見えない。返事がないので訊ねたが、なかなか少女は答えない。

やがて仕方なしに手を離すと、鏡はただの鏡になっていた。

呆氣に取られた自分の顔が写っている。少女も、宇宙も、もうどこにもないのであった。

「そうかこれは白昼夢だ」

夢ではなく白昼夢。なんて便利な言葉だろう。先人の残した偉大な知恵に感謝しつつ、クシャミ一つで俺はその場に立ち上がった。

その後は特に何も無い。帰ってから風呂に入り、底冷えした体を温めた。温めたはいいが、その日の出来事が原因で俺は三十九度の

熱を出し、三日も寝込む羽目になった。ただの三日ではない。受験生の貴重な七十二時間だ。

全快した俺はその遅れを取り戻すべく、普段より集中して勉強に励んだ。そのせいだろうか。神社であった出来事のことなど、すっかり忘れてしまっていた。

(2)

「我が星条学園は七十年の歴史を誇る名門校であります。新入生諸君はこの歴史と名誉に恥じぬよう」

式典における校長の話というものは中高変わらず長いものなんだなと辟易しながら、着慣れないブレザーに違和感を覚えつつも、俺は壇上の校長を見上げた。五十歳を優に超えているだろう初老の男性だが、雄弁な演説はとどまることを知らない。そのありがたさたるや頭部に後光が差す程だ。

四月、五分咲きの桜がそこかしこに見られるようになった頃、俺は私立星条学園に入学した。

補欠合格とのことだったが、担任教師の驚いた顔がまだ記憶に新しい。半ば諦めていた名門校への合格に両親は歡喜してくれたし、中学の友人たちも驚嘆していた。

だが誰よりも驚いたのは、他でもなく俺である。

直前に受けた模試の結果はD判定。天地がひっくり返っても無理という程でもなかったが、正直のところ自分でも諦めていた。

しかし結果は見事合格。どうやら自分でも気づかなかったが、俺は本番に強いタイプだったらしい。

努力は報われる。悪は滅びる。満員の環状線も一周待てば席が空く。勸善懲惡的な美德に思いを馳せながら、俺はしみじみと体育館に並ぶ新入生たちの姿を見回した。

「にやけてるよ君。星条に入学できたのがそんな嬉しいかい？」

声をかけてきたのは、隣に立つ男子生徒だった。

男にしてはやけにさらさらとした髪。小柄な顔には胡桃のような瞳を湛え、爽やかな笑顔は愛嬌に満ちている。その端正な顔立ちは一見すると女子に間違えそうだが、紛れもなく彼は男子の制服を着用していた。細身で華奢な体躯のせいかなネクタイがよく似合う。おろしたての制服をいとも簡単に着こなしているのは少し癪だが、不

思議と嫌味な感じはない。

「そりゃ、俺は補欠合格だからな。余裕綽々で合格した秀才たちとはありがたみが違うさ」

いちいち威張ることでもないが、隠す理由もない。それが入学して最初に話す同級生ながら、なおさら胸襟を開く方が得策だろう。

一瞬だけ奇妙な間があつたが、彼はまたすぐに外連味のない笑みを浮かべた。

「ハハハ。そりゃすごいね。補欠って確か一人だけだったはずだけど、君はよほど運が強いと見た」

「実力と言ってくれよ」

校長の長い話が続く中、二人に静かな笑いが漏れた。

「でも、今からうちの生徒、特に女子生徒をチェックしておくのは賛成だ。七十年とある歴史の中で、僕たちは運のいい星条生なんだからね」

星条生　まだ実感の湧かない言葉に胸が躍る。しかしふと、彼の言葉に引っかかるものを感じた。

「俺たちの運がいいって？」

疑問を口にすると、彼はきょとんとした表情を浮かべた。

「知らないのかい？　星条学園は長年に渡る男子校という体制から脱却して、今年から共学になったんだ」

「へー」

知らなかった。何せ勉強しかなかったからな。足りない頭脳では試験以外のことに回す頭がなかった。

「なら、記念すべき最初の女子生徒を今からチェックしない理由はない。ほら、ぱっと見渡しただけでも妙ちくりんな子たちがいるだろ？　四捨五入すれば一世紀も男しかいなかった空間にそのうら若き身を投げ込もうだなんて女の子は、妙ちくりんな変わり者ばかりだろうけどね」

「そんなばつさり言わなくても……」

苦笑しながら、俺は彼の視線のある方へ目をやった。確かに、男

子に比べて女子はだいぶ数が少ないようだ。

色んな生徒がいる。みな校長の話に飽き飽きしているのは同じだが、彼の言うとおり中には妙ちくりんな生徒も混じっていた。

他の生徒の注目も集めていたのは最後尾左側、長い黒髪を持ったセーラー服の少女である。セーラー服はごくありふれた女子高生の制服だ。ではなぜ彼女だけが目立っているかというと、先に述べたように我が星条学園の制服は、ブレザーだからである。女子の場合、淡黄色のブレザーに深緑色のチェックスカート。男子の制服も同色の組み合わせだ。だが彼女だけはセーラー服だった。紺色のスカートの白のブラウス。真紅のタイが生徒たちの中で一際目立っている。整列する四百名近くの生徒の中、一人だけ指定外の制服を着ていればそりゃ目立つ。それだけで目立つのに、彼女はもう一つ、特筆すべき風貌を抱いていた。

「ス、スケバン……」

思わず言葉が漏れていた。

スケバン、それは二十年以上前に流行した不良女子のファッションである。その特徴は異様に長いスカートにあり、彼女のスカートもまた床に着きそうなほど長かった。

明らかに時代遅れの風貌。古い漫画やドラマでしかお目にかかれない少女がそこにいた。

合格後に届いた案内によれば確かに指定の制服が必須だったはずだが、入学初日から校則違反とは度胸がある。

すると偶然、彼女と目が合った。性格はきつそうだが、よく見るとずいぶん整った顔立ちをしている。せつかくの機会なので笑顔に向けてみたが、返ってきたのはどぎつい睨み顔だった。

「あの子には近づかないでこっ……」

気を取り直して反対側、後列の右側に目をやると、堂々と読書に励む少女が目についた。

こちらはちゃんと指定の制服で、黒い三つ編みに眼鏡といった文学少女的な風貌なのだが、なかなかどうして、この入学式という場

をまるで気に留めていなかった。表紙を見る限りおそらくは古典文学なのだが、尋常じゃないスピードで読み進めている。漫画でさえ一冊一時間以上かけて読む俺には理解できない速さだった。

「なるほど、確かに妙ちくりんばっかだ」

ひとしきり体育館を見渡し、変に納得していると、ようやく校長の話が終わった。式が終わり、司会役の教師が順繰りに体育館を出るよう促している。

そう言えば、入学式では恒例とも言える新入生代表の挨拶はないのだろうか。新入生代表は大抵、入学試験に首席で合格した人間が務める。こんな名門進学校にトップで合格した奴の顔を拝んでみたかったのに、残念だ。

「一緒のクラスになれるといいね」

隣の列が指定され、今まで話していた男子生徒もまた歩き出した。

「ああ、俺は橘京介。お前は？」

「よろしく京介。僕は空姫」

何を思ったか、彼は持ち前の爽やかな笑顔で、軽くウインクをした。

「空姫涼子そらひめりょうこっていうんだ」

「……へ？」

手を振りながらご機嫌なステップで去っていった彼女に、俺はしばし瞠目していた。

涼子なんて名前は、当然のごとく男子のものではない。

彼女は女だったのだ。

「お前が一番妙ちくりんじゃないか」

人混みに消えていく彼女を見送りながら、俺は呆れていた。呆れながら、笑いが込み上げてくる。予感がした。確かな予感が俺の胸に去来する。

これからの三年間は、きっと平穏にはならない。  
たぶん、よくも悪くも。

(3)

春の息吹を感じさせる陽気の中、体育館から校舎へと通ずる渡り廊下は、独特の期待と緊張感とで満ちていた。

郊外の山麓に位置するこの学校は、周りが豊かな自然に囲まれ、見渡す限りが森林だ。ふと視線を横にやれば、緑したたる野山が辺り一面に広がっている。

小高い丘に建つのは昔ながら木造校舎。さすがに創立以来同じ建物を使っているわけではないが、最後の改築が今から三十年以上前なだけに、至る所に綻びがあった。壁のくすみや補修された板張りの床、使い古された下駄箱のロッカー。星条学園はそこかしこに、七十年の歴史を刻んでいる。

体育館から教室に移った新入生たちは、玄関ホールに貼り出されたクラス分けを元に、皆各々の教室へと移動した。途中、例のスケバン少女が教師に呼び止められ注意を受けていたが、見て見ぬふりをした。A組からJ組の十クラスがある中、俺の所属はB組だった。一年の教室は二階にある。二年は三階、三年は最上階となる四階といった具合に、学年が進級するにつれ階も上がっていく。一階には購買部や食堂、特別教室などが位置している。と学校案内に書いてある。

黒板に貼り出された座席表を確認して、俺は教室の真ん中にある席に腰を下ろした。

ざっと教室内を見る限り、男子と女子の比率は七対三といったところ。なるほど体育館で会った空姫が言うとおり、女子の方が少ない。

「まさか、他にもあんな奴はいないだろうな……」

空姫涼子　彼だと思っていたはずの人間は彼女であり、女子だった。まんまと服装に騙されたが、さすがにあんな変人は一人だけだと信じていた。



教室内にその空姫の姿はなかった。変人とはいえ気さくな奴だったので少々残念だが、あいつなら教室外でも普通に話しかけてくるだろう。

それに、これから新しい学友たちとはごまんと知り合えるのだ。勉強についていけるかどうかは不安だが、まあなんとかなるだろう。なんたつて俺は、本番に強い男だからな！

新生活のスタート。新たな学び舎、新たな学友。俺はクラスメイトと親睦を深めるため、早速隣の席に座る人物に声をかけようとした。

「げえ！」

だが隣にいた女子生徒の姿を見て、下品な声を上げてしまった。

「は？ 何アンタ」

間髪を入れずドスのきいた睨みが返ってきた。

彼女の長い黒髪は鴉羽のように艶を帯び、色白の肌によく映えている。眼光は鋭いが、その瞳には黒曜石のような光沢があった。垢抜けた雰囲気の子か大人びた妖艶さを持つが、桃色の唇が年頃の少女らしさも添えている。着崩したブラウスからは新入生らしからぬ色香が漂っており、制服越してもスタイルのよさが読み取れた。百人に聞けば百二十人がそうと答えそうな美少女。入学早々こんな女子生徒に出会えた俺は幸運なのだろう。彼女の着たセーラー服と異様に長いスカートを除けば。

「……ス、スケバン女」

彼女は体育館で異彩を放っていた、例のスケバン少女だったのだ。よりによって同じクラス、しかも隣の席とは。

思わず声に出してしまったが、彼女からの反応はない。真っすぐ前を向いて不機嫌に眉を顰めている。完全に無視されていた。

だが物は試し。俺は空姫の時と同じく、気さくに話しかけてみることにした。もしかしたら尖っているのは格好だけで、中身はいい奴かもしれない。

「奇抜なファッションだな」

「馴れ馴れしいのよ。話しかけてくんない」

前言撤回。ゾツとするぐらい敵意を持った声色が返ってきた。同じ変人でも、空姫とは種類が違うようだ。

それから間もなく担任の教師が入室し、その会話とも取れないやり取りはあっけなく中断された。

担任の簡単な紹介が済んだ後、ホームルームは恒例の自己紹介に入る。

最初はぎこちなく始まった自己紹介だが、何人かギャグを交えてくる奴らもいて徐々に場の空気は和んでいった。

「橘京介です。補欠合格だけど入っちゃったものは一緒なんで仲よくしてください」

無難な笑顔を湛えて、俺は着席した。そのまま自己紹介は後ろに回ったが、ふと隣でぼそとした呟きが響く。

「どうりで」

「どうりでって何だよ」

他を邪魔しないよう囁き声で抗議を向けると、彼女はつんとした表情を崩さず妖艶に嘲笑した。

「そのまんまの意味よ」

体育館での空姫の言葉を信じるなら、補欠合格は自分ただ一人だ。つまりこの学校で俺より入試の点数が悪かった人間は一人もおらず、三大論法的にこいつは俺よりも頭がいいのだ。スケバンなのに、これは悔しい。

「いちいち刺のあるやつだな、お前って……」

呆れながら述べたその言葉をかき消すよう、彼女は矢庭に立ち上がり、一言

「乾桜子」

とだけ告げてまた着席した。ちょうど自己紹介の順番が回ってきたようだが、「お前」と呼んだことに怒ったようにも見えた。それ以後はまた澄まし顔で、他のクラスメイトの興味を示す素振りもない。その冷淡な態度に周りは呆氣に取られていが、教師に促されて自己紹介は再開された。

桜子……か。確かに美人だが、桜って感じはないよな。少なくとも儚げな感じではない。

そんなことを思いながらなんともなしに彼女を見てみると、またもや凄い形相で睨まれた。

「わかった……もう話しかけないよ」

完全に人を寄せ付けない態度。ここまでされるとお手上げだ。隣人としての友好関係は築けそうもない。

「君、度胸あるねー」

肩越しの声に振り向くと、後ろの席の男子が感心した面持ちを向けていた。

さっぱりした髪に、女子受けしそうな容姿。男子にしては低めの背丈。彼の右目の下には泣きぼくろがあった。名前は確か。

「天野だよ。あまのしょう天野翔。もう忘れたのかい？ 今紹介したばかりなのに」

わずかな沈黙でそれを察してしまったのか、彼は不平がてらに本日二度目の自己紹介をした。

「すまない。忘れっぽい性格なんだ」

自己紹介が続く中、俺らはお互い進行を邪魔しない程度の声量で会話を続けた。

「仮にも星条生なんだから、たかだか四十人の名前くらい一瞬で覚えなないと」

「……さすが星条の生徒ともなるとそんな暗記ができるのか？」

感心して目を剥いていると、すかさず彼がこう切り返した。

「いや僕には無理だけどね」

なんだそりゃ。

「でも君の名前は覚えたよ。補欠合格の橘京介くんだ」

「それ、他人に言われると複雑だな」

「いいじゃないか、インパクトがあつて。隣の彼女ほどじゃないけど」

澄まし顔で、天野は横目を投げた。視線の先にはもちろん乾桜子

がいた。

「僕なら話しかけられないなあ」

それ、本人にも聞こえてると思うんだが。

隣の様子を伺う。彼女は気にも留めていない。どうやら徹底的に無視することにしたようだ。

「まあ何はともあれ、僕たちはつらい受験勉強を乗り越えて、こうして同じクラスになれたんだ」

構えない笑顔で、彼はずっとその手を差し出した。

「よろしく、橘くん」

「京介でいいよ」

躊躇わず俺は彼の手を取った。同性では初めての学友ということになるだろう。

だがふと思い至って、俺は彼の体をまじまじと見つめた。

「な、なんだい……京介」

「いや、その……つかぬこと訊くんだが……」

天野が怪訝そうに眉を顰める。

「お前はその、ちゃんとした男だよな？」

それを聞いた天野が途端に呆れたような声を上げる。

「当たり前じゃないか。何でそんなこと訊くの？」

即答した天野に、俺は安堵の溜息を漏らしていた。

「何。ちよつと例外に会ったのさ」

天野がぼかんと口を開けていた。感の鋭い彼でも、流石に男装した女生徒がいるとは思わなかったのだろう。

「……ん？」

その時、誰かの視線を感じたような気がして、俺は隣のスケバン少女の方を見た。だが彼女は変わらず不機嫌そうな顔で教室の前方を睨んでいる。気のせいだったか。

訝んでいると、最後の一人が自己紹介を終えた。まだ遠慮がちではあるが、周囲の人間と会話を試みる生徒もちらほらと現れている。簡単なステップだが、俺たち赤の他人は、一応のクラスメイトとい

う関係に昇格したのだ。

兎にも角にも、新生活。

教室は高揚と活気に満ちていた。

(4)

早いもので入学式から一週間が経った。

一週間前はただの見知らぬ他人であったクラスも、それだけあれば十分に友と呼べるものになる。ただの机と椅子だった物がいつしか自分の居場所に変わり、そこから交友関係もまた広がって行く。授業進度が中学のそれよりも遥かに早いことに辟易しつつも、一年B組の連中は少しずつ環境に馴染んでいった。

そんな中で、目立って連帯感の強いグループが現れ始めた。彼らには共通点がある。寮生だ。

星条学園は名門私立。県外からの生徒も多い。そのため校舎に隣接した学生寮では多くの学生が寝食を共にし、授業外でも頻繁に顔を合わせている。必然的に寮生間の親密度も高まりやすいのだ。生徒全体に占める寮生の割合は二割ほどで、単純計算、四十人いる級友のうち八人が寮生ということになる。

「寮ってどんな所なんだ？」

試しに寮生である天野に訊ねてみると、彼は「賑々しい所」と即答した。一週間話してみたが、天野は爽やかな好青年で、空姫に及ばずとも劣らず凛々しさがある。空姫は女子なので、比べる対象として間違っているかもしれないけど。

「名物寮らしくてね。いろんな伝説があるらしいよ。僕もまだ幾つか聞いたんだけど。ただ、とにかく先輩が強引だ」

言いながら天野は苦笑した。元男子校における上下関係は共学以上に厳しいイメージがある。そういえば去年までは完全に男子校だったのだから、二年以上は全員男なわけだ。その中でペーペーの一年はさぞ肩身が狭かろう。

「へー、面白そうだな」

わずかばかりの皮肉を込めて呟く。

「今度遊びにおいでよ」

だが天野は屈託のない笑いを浮かべた。きっと寮はいい場所なのだろうし、こいつもいい奴なんだろうな。自宅からバスで一時間かけて通う身としては羨ましい限りだ。

「ちなみに伝説といえば、この周辺には校外にもちよつと不思議な伝説がある」

会話に切れ目を持たせず、嬉々として天野がしゃべり始めた。もしかしてこいつは話好きなのかもしれない。

「不思議な伝説？」

「そう。実はこの星条学園の周辺にはとある神様がいて、僕たち生徒の行いを見張ってるっていうんだ」

「そのどこが不思議なんだ？」

神が見ているから悪さができない、なんて教えはどこにでもありそうなものだ。

「それがその神様は、鏡の中から人間たちを見守ってるんだよ」

「鏡の中？」

はて。どこかで聞いたような。

「だから星条生が何か悪さをする時は、鏡の前は避けろっていうのが習わしなんだ」

「悪さはするのかよ」

変わらない調子で述べた天野に俺は口角を引き攣らせた。

「見つからないようにそこそこの悪さをする。それが星条生、とりわけ寮生の信条さ」

その後、教科担任の教師が教室に入り、天野との会話は中断された。あのまま天野と話していたら何時間でも会話が続きそうだったので助かった。いい奴なんだが、ちよつとおしゃべりかもな。

そのまま机から教科書を取り出していた俺だったが、不思議と違和感を覚えて動きを止めた。

最近、何かを忘れているような気がする。

忘れているぐらいだから些事かもしれないが、こうして新生活を満喫する最中も、それは時折鎌首をもたげた。

隣を見る。スケバン少女、乾桜子がいる。彼女とはあれ以来一度も会話していないが、持ち前のつつけんどんとした態度でクラスに馴染む気配がない。

廊下では何度か空姫涼子と出くわした。その度に気さくな態度で話しかけてくる彼女は、相変わらず男子の制服を着込んでいる。にもかかわらず学校には溶け込んでいる様子で、生徒たちの懐の深さも名門と呼ばれる所以だろうか。

乾も空姫も、タイプは違うが変な奴だ。星条に変人が集まるのは重々承知だが、あの二人には少々面を食らった。

だがそれ以上に変な奴がいなかっただろうか。

奇妙な感覚に苛まれていると、斜め前の女子生徒が使ったスタンド式の手鏡が目に入った。

机の上に乗った小さな鏡。身嗜みを整えるために鞆から出したのだろうが、教師が来てもそのままだ。おそらく仕舞い忘れているのだろう。

鏡の中から生徒たちを見守る神様、か……。天野の話を思い出した。そんなものがいたらおちおち学生生活も営めない。何だって自由が一番だ。伝説だか何だか知らないが、大方、生徒に規律を守らせたい昔の教師が面白半分で言い始めたのだろう。

机の上で教科書を広げながら、俺はふと、先程の鏡に目を止めていた。

まさかと思い目を逸らす、二度見する。  
いる。

俺の他は誰も気付かない机の上の小さな鏡

その中で、ぶんむくれた栗毛の少女が肩を怒らせ、こちらをじっと睨んでいた。

月島神社は、星条学園に向かう通学路上に存在する。正確に言えば、街道をやや外れた山間に位置している。



月島街道。山中を突っ切り、街の南と西を結ぶ抜け道として使われるが、周囲には民家もなく、夜となれば少ない街灯の下、深い闇の帳が落ちる。そんな山道をやや逸れた場所に廃神社はひっそりと佇んでいた。

二ヶ月前、まだ雪が降り積もる頃、俺はここで星条学園への合格を祈願した。今ではすっかり雪は溶け、辺りには土筆や路の董が群生している。山は春を芽吹き、夏の準備を迎えていた。だがあの時と変わらず、境内に参拝者の姿はない。

「こうして見ると明らかな廃墟だな」

前回は雪のせいで把握しづらかったが、剥き出しの敷地は完全に荒廃していた。石畳は崩れ、雑草が繁茂している。社務所らしき建物も今は倒壊寸前で近寄るのも危険そうだ。少し歩を進めると、土まみれの絵馬が地面に散乱していた。風化のため文字は読み取れない。かつてはそれなりの参拝者がいたのだろうが、今では面影すら残っていない。ここは完全に廃神社だ。

しかしその割に拝殿は綺麗だった。賽銭箱の置かれた小さな建物。半紙のない障子扉から、空っぽの内装が顔を覗かせている。俺は二ヶ月前、この場所で不思議な体験をした。

「遅い！ 遅すぎる！」

そう。ちょうどこれと同じ、高慢ちきな音色だ。

拝殿の中から響いているのは、聞き覚えのある少女の声。

躊躇いつつも、賽銭箱の奥にある扉を開ける。途端に埃の臭いが充満した。何もない伽藍堂の部屋。その中心に、例の丸鏡が落ちている。

「すまない……」

頭を垂れながら、鏡を覗き込む。

すっかり機嫌を損ねた様子の少女が、鏡の中で醤油煎餅をかじっていた。

ウェーブがかった栗毛髪に端麗な容姿。この前着ていたのとは違うワンピースは春物で、淡い空色が白い肌にはよく映えている。華

奢な腕が頸になり、肉付きの少ない身体が見て取れた。

「願いを叶えて貰った分際で礼も言いに来ないとは見下げ果てた奴じゃな！ そなたが来るまでにわらわが何枚の煎餅を完食したか教えてやるつか！」

ガミガミと怒鳴る彼女はちやぶ台の前に座っていた。前と同じ球体の中の和室風の部屋だが、季節柄、炬燵は仕舞われたようだ。

「ごめん……完全に夢かと思って……ちなみに何枚？」

「八万四百六十二枚」

「……その心は？」

「やおよろず（80462）だ！」

「お上手」

「からかっているのか！！」

彼女は両手を上げて憤慨した。自分で言ったくせに。

「しかしあの出来事が夢じゃなかったとすると、俺が星条学園に合格できたのは……」

「すべてわらわの力じゃ」

胸を張って即答した少女に、がっくりと項垂れた。

合格発表当日の気も狂わんばかりにはしゃいでいた自分の姿が蘇る。星条学園の玄関前。掲示板に貼り出された自分の受験番号を見て、俺は人目を忍ばず歓喜した。絶叫した。俺つえええと本気で思った。

だがそれは、見事な他力本願であつたという。神頼みしたのは確かだけどさ、それは心の持ち様だつたんだよ。まさか本当に願いが叶えられるとは思わないじゃないか。

「変だと思つたよ……俺の実力で受かるわけないもんなあ……」

涙で鏡が滲んでいた。目の前の少女から見て、あの日の俺はさぞ滑稽だつたのに違いない。

「では約束通り、わらわの願いを叶えてもらつぞ」

喜色満面に少女は言い放った。

しかし心当たりのない言葉に俺は眉を顰める。

「ん、何だっけそれ」

「まさか忘れたのか！？ そなたの願いを叶える代わりにわらわの願いを叶えると言ったであらう！」

彼女の叱責に、鏡越しに感じた温もりのような錯覚が、わずかが手の平をくすぐる。

ガラス越しに合わせた手と手。彼女は言った。契と。

「ああ、そう言えば！」

全てを思い出し、俺は拳をポンと手のひらに乗せる。

「忘れすぎだ！」

一文字一文字にイントネーションをつけながら、呆れ顔で少女が怒る。

「いやあ、昔っから忘れっぽいんだよ。このこともなんだか夢現な感じで。でも今は思い出したからさ！」

ごまかし笑いをしながらも、徐々に蘇るあの日の記憶。あの雪の降る日、確かに俺は、この少女に出会ったのだ。

「そうそう。名前は確か、ええと」

言いかけて、俺は口ごもった。

この子の名前、何だっけ？

「名前などない。わらわは神じゃ。人の子に気安く呼ばれるような名は持たぬ」

少女はつつけんどんに言い放った。どうやら忘れてたのではなく、初めから知らなかっただけらしい。

「でも名前がないってのは色々と不便だな。俺がつけてやるよ」

そう提案すると、少女は恥ずかしそうに顔を紅潮させた。

「そ、そんなものはいらぬ！」

俺は構わず、彼女につけるべく名前を思案し始めた。折角の機会だ。とびっきりの名を授けてやろう。

「神様だから、なんだろう。イザナミがなんたらとか……イザナギは……男か。いいやめんどくさい。神子でいいや。よろしく神子」

「適当だなおいっ！」

「いいじゃないか。神子。月島神社の神様だから、月島神子。いい名前だろ？」

適当に決めたにしては、要点を捉えたいいい名前だと思う。

「……………もう、勝手に呼ぶがよい」

少女改め月島神子は何やら落ち着かない様子で、もじもじと手を擦り合わせていた。

「ところでさつきから気になっていたんだが、そこは一体、何処なんだ？」

鏡の中の不思議な二畳間。布団部屋よりも狭い空間は、一体どのような仕組みで成り立っているのだろう。

「ここは神聖なる神の世界、幽世じゃ」

「……は？」

我ながら素っ頓狂な声が出た。

「わからぬか？ そなたのいる世界は、時間と有限の中に存在する。だがこの幽世は無限じゃ。永遠じゃ。人間の世界とは完全に隔絶された絶対的な神性空間がこの場所である」

脈絡のない説明に困惑していると、少女が中空に手を添えた。

「証明してやろう。見ておれ」

するとその小さな手の平に、仄かな光芒が集まってきた。集束した光は徐々に輪郭を帯び、確かな質感を形成する。やがて物体を包んでいた光が消えると、彼女の手になぐとした林檎が一つ乗っかっていった。

「どうじゃ、見ただろう」

高慢な口調で口端を引き上げ、少女はその林檎を齧った。口に含んだそれを咀嚼するたび、シャリシャリという瑞々しい音が響いた。「本物……なのか？」

何度も目を擦って、歯型のついた林檎を確かめる。見間違いない。それは紛れもなく本物の林檎で、彼女はそれを手品のように中空から取り出した。夢のような力で、そこは夢のような場所だった。

驚きのあまり呆然としてみると、突然シャッター音が聞こえた。見ると、少女がその手にポラロイドカメラを抱えている。

「ほれ、そなたの間抜け面を記録することもできる」

排出口から出てきた写真を、彼女は鏡越しに見せてきた。写真には俺の顔が写っている。不意を衝かれたためか悔しいかな本当に間抜け面だった。背景にはこちら側からは見えない部屋の様子も写っている。そこにも扉はなく、後ろには壁だけがある。そして壁際に一台の古い鏡台が置いてあった。俺の顔はその鏡に映し出されている。どうやら彼女の方も、鏡からこちらの世界を覗いているようだ。「このようなこともできる」

神子はカメラをどこかに消し、再び中空に向かって手の平を添えた。

また同じように光が集まる。創り出された輪郭は一枚の薄っぺらい紙となり、少女の人差し指と親指に挟まれた。途端に輝きが霧散し、一枚の用紙が姿を現す。

「ほうほう……」

少女はまじまじとその用紙を見つめ、嘲笑めいた顔をこちらに向けた。

「これではとても星条学園には受からなかったじゃろうなあ」

「はい!？」

驚嘆した俺に、彼女は用紙の表を見せた。文字情報が羅列されたそれに、俺は見覚えがある。

「それ、俺が直前に受けた模試の結果じゃないか!？」

なぜそんなものがそこに。机の中に仕舞ってあるはずだ。

「これを見ると、合格の最低ラインにあと二百人は抜かねばならぬのう。たったあれだけの期間で、奇跡でも起きない限り合格は無理じゃろう」

彼女の言わんとしていることはありありと伝わってきた。

「あくでも神子の力……ってことだな」

俺は彼女の力によって俺は合格した。それは疑いようのない事実。

彼女は自由自在に物を取り出すことができるし、個人の情報まで俯瞰できる超越した存在だ。

幽世。絶対的な神性空間。

彼女の言ったことの意味が、今はっきりと理解できた。

彼女は、神なのだ。

「わらわはこの場所から常に人間世界を見守っておる。そして時折、誰かの願いを叶えておるのだ」

神子は微笑した。神性を帯びた妖美な仕草は美しく、同時にどこか、非人間的だった。

「とにかく、契約は履行してもらおう。この写真を見よ」

神子は懷から一枚の写真を取り出した。これもさっきのポラロイドで撮影したものだろうか。鏡に押し付ける形でこちらに写真を見せる。

「これは……？」

拜殿から外を見たアングルで、艶髪の少女が写っていた。背景の木々を見る限り晩冬か初春だろうか。以前ここに参拝した俺と同様に、彼女は両手を合わせ、熱心に何かを祈っている。

「……はて、どこかで見たような」

端正な顔立ちだがやや鋭い目つき。写真だけでも気の強さが滲み出ている。泰然と構えたその風貌は、人を寄せ付けないオーラがある。

「スケバン女じゃないか」

それは乾桜子その人だった。いつも隣の席に座っているスケバン少女。私服姿なので一瞬わからなかったが、間違いない。

「そのスケなんちゃらというのは何だ？」

「一昔前の非行少女のファッションさ。いや、二昔前かな……」

しかしこの場所に来たということは、彼女もまた月島神社の参拝者ということになる。こんな辺鄙な廃神社に……奇遇を通り越して奇特だ。

「なるほど、こやつは非行少女なのか……しかしまあよい。そなた

が知り合いならば話が早い」

神子はどこからか扇子を取り出し、音を立てて広げた。上機嫌を示す天晴のポーズ。まったくコロコロと、表情のバリエーションが豊かなな。

「わらわの願いとは、この女に関することじゃ」

「乾に？ まさかこの不良女を更生しろってのはやめてくれよ。教師じゃあるまいし」

終始しかめっ面で教室にいる乾桜子の姿を思い出す。威圧だけで負けそうだ。

「更生など頼まぬ。人間が人間を変えようとしても、程度は高が知れてるからな。そなたにはこやつと」

告げられる命令に息を飲む。なるべく乾には近寄りたくなかったが、この際仕方がない。できるだけパツパと済ませて、元の平和な高校生活に戻ろう。

「子をなして貰う」

早急に世界が静止していた。

「たのむ……聞き間違えたからもう一度」

傾いた体と思考を立て直し、再び神子に問う。

予想通り機嫌を損ねた彼女は、億劫そうにこちらを睨んだ。

「はあ？ ちゃんと言ったであろうが。そなた橘京介はこの乾桜子とやらと、子供を作るのだ」

頭の中が真っ白になる。

月島神子。

鏡の中に住む神様。

ただでさえとんでもない存在である彼女は

とんでもない依頼を俺に持ちかけてきたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0335z/>

---

月島神子は覗いている

2011年12月1日14時50分発行